品詞と意味概念から見た日中二字複合漢語の語構成の違いについて

蔡　嘉綾・上原　聡　東北大学

1.　研究目的

中国語母語話者が日本語を学習する場合には、日本語と中国語は同じ漢字を使用している言語であるから、日本語はアルファベットしか使わない英語より親しみやすく、習いやすいと思う人が多い。しかし、日本語と中国語は同じ漢字を使用していても、日中両言語にさまざまな違いがある。例えば、「本を返却しました」の「返却」や「ベッカムに魅了された人達」の「魅了」、「愛着をもって住める家」の「愛着」や「看過できぬ金融庁の怠慢」の「看過」など、中国語の四つのアスペクト助詞の「却(què)」、「了(le˙)」、「着(zhe˙)」、「過(guò)」を含む二字漢語は、中国語国語母語話者にとって、一見なんとなく分かる気がするが、実際に辞書を調べなければ本当の意味をつかめない。本論では、日中対照研究の観点から、両言語の品詞と意味概念の違いを通じて、中国語の四つのアスペクト助詞の「却(què)」、「了(le˙)」、「着(zhe˙)」、「過(guò)」による日中二字複合漢語の相違について考察する。

2.　研究内容

2.1　中国語の虚詞と実詞について

伝統的な中国語の文法には、実詞（実字）と虚詞（虚字）という概念がある(以下は実詞と虚詞)。現代の言語学の用語に当てはめると、実詞は名詞、動詞、形容詞など、実質的な語彙的意味をそなえており、主語や述語などの文法成分になることができるものを指す。虚詞は前置詞、助詞、接続詞など、単独で文法成分にならず、文法的意味、あるいは語気や感情を表すのに用いるものを指す。

現代中国語の文法では、「返却」、「魅了」、「愛着」、「看過」は、それぞれアスペクト助詞(虚詞)の「却(què)」、「了(le˙)」、「着(zhe˙)」、「過(guò)」を含む漢語であり、一語として使わない熟語である。一方、日本語における「返却」、「魅了」、「愛着」、「看過」の漢語はどれもそれ自体で意味を形成し、一語として用いられている。中国語は「実」と「虚」という概念を持つが、日本語はそれを持たない、というような根本的な概念の差異で、日中両言語における漢語にどのような影響を与えているのか。また、その影響によって、両言語の間にどんなずれが生じるのか。本論では、このようなアスペクト助詞(虚詞)を含む日中二字複合漢語を集めて、品詞と意味概念の面からその相違を明らかにする。

2.2　研究範囲

本論ではアスペクトを表す助詞である「却(què)」、「了(le˙)」、「着(zhe˙)」、「過(guò)」の四つの虚詞を取り上げ、これらの虚詞を含む日本語と中国語の二字複合漢語をそれぞれ分類して、品詞、意味概念の観点から日中二字複合漢語の相違点を究明する。虚詞Ａを含む二字漢語は、「Ａ－」と「－Ａ」という二つの形あるが、中国語の虚詞においては、「－Ａ」という形だけアスペクトの作用を持つと認識されているため、本論では、「－Ａ」という形の二字漢語だけを扱い、考察していきたい。

2.3　参考資料

日本語と中国語における漢語の数及び語釈のデータベースは以下のとおりである。

中　国　語	日　本　語
1. 台湾教育部『国語辞典』[1] 2. 角川書店『中国語大辞典』 3. 大漢語語林	1. 三省堂『大辞林』[2] 2. 小学館『日本国語大辞典』 3. 岩波書店『広辞苑』、『逆引き広辞苑』

なお、中国語から日本語へ翻訳は、講談社『中日辞典』、小学館『中日辞典』と日外アソシエーツ『逆引き中国語辞典』などの資料を参照する。

2.4　研究方法

本論では、中国語の四つのアスペクト助詞の「却(què)」、「了(le˙)」、「着(zhe˙)」、「過(guò)」による日中二字複合漢語を中心にして考察したい。また、資料が膨大なため、漢語を検出する基準は、次の点を考慮に入れた。日本語の方は、

(1)　原則として、二字の複合漢語しか考察しないため、三字以上の複合漢語は除く。

(2)　現代日本語では用いられない仏教用語や人名、地名などの固有名詞、当て字を除く。

(3)　(2)の項で考察からはずした漢語以外にも、日本語母語話者にアンケートによって、現代の日本語ではあまり用いられないという結果がでた漢語は、今回の考察からはずした。

中国語の方は、(1)と(2)の点だけ日本語と同じように取り扱うが、(3)の点では、ここでは中国語母語話者である筆者の内省をもとにする。

中国語では、最終的に分析の対象となった語は「ー却」が5語、「ー了」が7語、「ー着」が15語、「ー過」が18語である。日本語では、最終的に分析の対象となった語は「ー却」が21語、「ー了」が20語、「ー着」が62語「ー過」が17語である。

3.　品詞と意味概念の対照

現代中国語では、中国語におけるアスペクト助詞である「却(què)」、「了(le˙)」、「着(zhe˙)」、「過(guò)」の四つの虚詞は、実詞としての用法も保持しつつ、動詞・形容詞の後に現れてアスペクトを表す虚詞の用法を併せ持っているのである。

図 1.「～却」における日中二字複合漢語の品詞と意味概念の対照

<table>
<tr><td></td><td colspan="3">中国語</td><td colspan="3">日本語</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">「～却」</td><td colspan="3">「～却」</td></tr>
<tr><td>発音</td><td colspan="3">què</td><td colspan="3">きゃく</td></tr>
<tr><td></td><td>品詞</td><td>意味概念</td><td>例</td><td>品詞</td><td>意味概念</td><td>例</td></tr>
<tr><td rowspan="3">実詞</td><td rowspan="3">動詞</td><td>①断る。辞退する。</td><td>「推却」
「謝却」
「辞却」</td><td rowspan="3">(動)名詞</td><td>①もとへ戻す。</td><td>「償却」
「返却」
「吐却」</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td></td><td>②受けとらないこと。</td><td>「棄却」</td></tr>
<tr><td></td><td>②退く、退ける。</td><td>「退却」
「前却」</td><td></td><td>③取り去ること。なくしてしまう。</td><td>「忘却」
「消却」
「売却」
「減却」</td></tr>
</table>

[1] http://140.111.1.22/mandr/clc/dict/ のサイドを参照されたい。

[2] http://jiten.www.infoseek.co.jp/Kokugo?pg=jiten_ktop.html&col=KO のサイドを参照されたい。

					③捨てること。	「脱却」「没却」

図 1 で示したように、却(què)の場合は、現代中国語において、動詞(実詞)として使われているが、アスペクトを表す助詞(虚詞)としての役割が大きいので、現在使われる二字漢語において「推却」、「謝却」、「辞却」、「退却」、「前却」などの用法がまだ存在している。しかし、日本語の場合では、虚詞という概念がないため、「～却」を「もとへ戻す」、「受けとらない」、「捨てる」など、中国語と違う独自の意味が生じて、「忘却」、「消却」、「売却」、「棄却」、「脱却」、「返却」などの二字漢語を生産し、(動)名詞として使われる。

図 2. 「～着」における日中二字複合漢語の品詞と意味概念の対照

	中国語				日本語		
	「～着」				「～着」		
発音	Zhe˙、zhāo、zháo、zhuó、zhu丶				ちゃく		
	品詞	発音	意味概念	例	品詞	意味概念	例
実詞	動詞	Zhuó	①接触する。付く、付ける。付着させる。	「粘着」「帰着」「膠着」	(動)名詞	①衣服を体に付ける、着ること。	「脱着」「装着」「試着」
						②接触する。付着すること。	「付着」「撞着」「密着」「定着」「膠着」「粘着」
						③心が捕らわれる。こだわる。	「愛着」「頓着」「恋着」
		zháo		「点着」「巴着」「碰着」「摸着」「打着」		④決まりがつく。落ち着いている。	「横着」「決着」
	名詞	zhu丶	①明白である。顕着である。	「顕着」「昭着」「彰着」「卓着」		⑤行き着く。辿り着く。とどく。	「必着」「帰着」「発着」「到着」
実詞	名詞		②着作、着述	「遺着」「原着」「鉅着」「編着」			
		zhāo	囲碁や将棋の技、策略、手段。	「末着」「活着」「失着」「一着」			
		zhuó	①服装。身に付けるもの。	「穿着」「衣着」			
			②当て、手懸り、行方。	「無着」「土着」「次着」			

図二で示したように、例えば、着(zhe˙、zhāo、zháo、zhuó、zhu˪)は、現代中国語において、zhāo、zháo、zhuó、zhu˪などの発音の場合は、実詞としてまた用いられるが、zhe˙の発音の場合は、アスペクト助詞(虚詞)だけとして使われるので、一つの語として扱える二字漢語はもう殆ど存在していない。しかし、日本語ではずっと動名詞として用いられる。

次に、意味概念の部分では、日本語の場合では、本来中国語に存在する「接触する」、「服を着る」などの意味もまだ残っているが、他に、例えば、「心が捕らわれる、こだわる」、「決まりがつく」、「行き着く、辿り着く、とどく」などの意味が生起し、「必着」、「帰着」、「到着」、「愛着」、「恋着」、「横着」、「決着」など、中国語では説明しにくい二字漢語を生産し、(動)名詞として多く使われる。

実詞でも虚詞でも、全て漢字で表現する中国とは異なり、日本語の場合は、中国語の虚詞に相当する文法成分である助詞や助動詞が仮名で表される。したがって、日本語における漢字はすべて実質的な意味を持つことになり、実詞として機能することになる。このようにして、漢字特有の表意性と造語力を遺憾なく発揮し、中国語にはない新しい組み合わせを独自に創造し、日本語特有の漢語が多く誕生したのであろう。

4. 研究結果

4.1 品詞の転換による生産性の増加、漢語の数の増加

ある漢字が、もともと中国語において虚詞として使われた場合、中国語の文中での働きが助詞であるか、副詞であるかに関わらず、日本語の中では、名詞（実詞）として使われる数が非常に多い。(例えば、「必着する」、「愛着する」などの動名詞は、動詞と名詞両方の働きを持つものであると考えられる。ここではこれらを名詞とみなす)。また、荒川・那須(1992、pp. 76-77)と野村(1988、pp. 53-54)は、日本語における語構造のパターンは、〈名詞〉＋〈名詞〉、つまり、連体修飾の生産性が最も高いと述べている。このようなパターンによって、本来語構成においては中国語では語になりえないものまで、日本語では一語として認めてしまうので、本研究で考察したの四字に関する限り、日本語の漢語の数量は中国語のそれに比べて多くなる。

4.2 意味概念の転換による日本語独自の漢語の生成

例えば「～着」という字は、現代中国語において、持続アスペクトという文法形態素として働いていて、語彙的形態素の役割を果たしていないが、日本語では、「心が捕らわれる、こだわる」、「決まりがつく」、「行き着く、辿り着く、とどく」という意味を持ち、多くの現代中国語にはない日本語特有の意味を持つ二字漢語を生成するようになると考える。

【参考文献】

荒川　清秀／那須　雅之　(1992)　「中国語の造語力－二字漢語を中心に－」『日本語学』5 月号　75-85　明治書院

野村雅昭　(1988)　「二字漢語の構造」　『日本語学』　五月号　44-55　明治書院

本研究は、平成 17 年度日本学術振興会科学研究費補助金（No. 17401012）　の補助を受けて行われています。